

旧前田家鎌倉別邸の暖炉廻りの構成に関する研究

——近代住宅の室内意匠に関する一考察——

茶 谷 亜 矢

CHATANI Aya

非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻 博士後期課程

【要旨】 本論文では、旧加賀藩主前田家の別邸であり近代鎌倉を代表する3大洋館の一つとされる旧前田家鎌倉別邸（現鎌倉文学館、以下本稿では「鎌倉別邸」と呼ぶ）を取り上げる。

鎌倉別邸は、神奈川県鎌倉市長谷に所在する1936（昭和11）年築の国登録有形文化財であり、鎌倉市景観重要建築物等指定第1号として注目される歴史的建造物でもある。1983（昭和58）年に前田家から鎌倉市へ寄贈されて改修が行われ、1985（昭和60）年には鎌倉文学館として開館した。それ以降、鎌倉市の観光地の一つとして多くの観光客が訪れる観光地となっている。また、その個性的な外観からフィルムコミッションのロケ地などにも利用され知名度も高い建築であるが、旧前田家時代の建設経緯や建物の設計者の経歴や他の設計作品などに関しては研究が進んでいなかった。本研究では、鎌倉別邸の設計者渡辺栄治について前田家の建築に関わった前後の経歴や設計作品を紹介するとともに、鎌倉別邸の特徴である外観や内観、とりわけ暖炉廻りの構成について分析を行う。

本研究では、これらの分析に加え、当時の住宅の暖炉に関する写真集や遺構などから暖炉廻りの変遷をまとめ、昭和初期に建設された上流層住宅の暖炉廻りの構成及び内部空間の構成を考察する。

A Study of the Composition of the Fireplace Area in the Former Maeda Family's Kamakura Villa

—— An Examination of the Interior Design of Modern Residences ——

Abstract : The subject of this paper is the Kamakura Museum of Literature, a historical building that was previously a villa owned by the Maeda Family, the former head of the Kaga feudal clan. The villa, counted as one of the three renowned Western-style houses in modern Kamakura, is referred to in this paper as the “Kamakura Villa.”

The Kamakura Villa, built in 1936 in the Hase district of Kamakura City, Kanagawa Prefecture, is a historical building registered as a tangible cultural property, and has attracted attention as the first building to earn the city's Structures of Landscape Importance designation. After being gifted to the city of Kamakura by the Maeda Family in 1983, the Kamakura Villa was renovated and opened as the Kamakura Museum of Literature in 1985.

Since its opening, the museum has been one of Kamakura City's most popular tourist attractions

and the building's unique exterior has made it the Japan Film Commission's movie location of choice. Despite the property's widespread recognition, however, few studies have been made on its historical origins dating back to the former Maeda Family's era or on the career and work of the building's architect, Eiji Watanabe. This study discusses Watanabe's professional activities and his architectural designs produced around the time he was involved in the construction of the Maeda Family's villa. The study also analyzes the house's distinctive features, namely its exterior and interior features, including, in particular, the composition of the fireplace.

In addition to investigating these topics, the study examines the components and the internal space structure of fireplaces in upper class residences built in the early Showa period by shedding light on how fireplaces changed over time using historical sources such as photograph collections and fireplace remains of houses contemporary with the Kamakura Villa.

はじめに

神奈川県鎌倉市長谷（図1）に所在する鎌倉文学館（写真1）は、旧加賀藩当主前田利為の鎌倉別邸として1936（昭和11）年に建設（設計：渡辺栄治、施工：竹中工務店）され、1983（昭和58）年に鎌倉市へ寄贈、改修を経て1985（昭和60）年に鎌倉文学館として開設した。1990（平成2）年に鎌倉市景観重要建築物等指定第1号⁽¹⁾に、2000（平成12）年に国登録有形文化財に指定された⁽²⁾。開設40年、建設後80年が経ち、現在は劣化調査により全般的な補修が予定されて休館中である。

前田家第16代前田利為侯の伝記『前田利為』（1986）によれば、前田家鎌倉別邸（以下、「鎌倉別邸」とする）は、第15代前田利嗣侯により、明治中期に創設された⁽³⁾。明治期、鎌倉御用邸が建設される頃までは、皇太后（英照皇太后）や皇太子（大正天皇）や宮家、皇后（昭憲皇太后）などの行啓があるなど、旧華族の別荘として前田家の中でも特に利用が多い別邸とされてきた⁽⁴⁾。のちに前田利為（1885-1942）によって明治、大正、昭和初期に再建や改築があり、昭和期には「定住邸」「本邸化」を目指して整備された⁽⁵⁾。そのような経過をたどることから、別荘としての性格だけでなく住宅としても近代鎌倉に建設された旧華族の住宅変遷を示す貴重な建築としても注目されている。

（1）研究の目的

明治初期は、西洋文化の導入に伴い、上流層を中心に本格的な西洋館が多く建設されたが、明治中後期には擬洋風や日本の伝統的な和風の要素を積極的に取り入れ和洋折衷と呼ばれる様式が流行した。明治後期から大正期にはアール・ヌーボーやアール・デコなど新しい様式が入り多様な建築が広まり、上級の中流層に文化住宅が流行したという時代的背景がある。

鎌倉別邸は、国指定文化財等データベース（文化庁）では「ハーフティンバーとスパニッシュを基調とした邸宅建築⁽⁶⁾」と紹介され、『日本近代建築大全【東日本篇】』（2010）では「和風の意匠も随所に混在する⁽⁷⁾」とあるように、和風を混在させた洋館として知られている。この和風の意匠は外観だけではなく、とりわけ主要な居室の暖炉廻りなどの内部空間にもみられる。日本近代住宅において暖炉廻りの構成には注目されておらず、現段階で鎌倉別邸の暖炉廻りの位置付けをすることは難しい。



写真1 鎌倉文学館（旧前田家鎌倉別邸）南面 2020年（筆者撮影）



図1 神奈川県鎌倉市長谷の位置図

そこで本研究では、洋館の主な構成要素である暖炉廻りを中心に、写真や図面等の非文字資料から分析を行い、内部空間を考察する。日本近代住宅の暖炉廻りの構成についてその概要をまとめ、内部空間の解明を図ることを本研究の目的とする。

(2) 既往研究と研究方法

① 前田家鎌倉別邸

前田家に関しては伝記『前田利為』のほか、公益財団法人前田育徳会監修の『加賀前田家と尊経閣文庫』⁽⁸⁾や「前田家鎌倉別邸の変遷」⁽⁹⁾（浪川 1994）、『加賀百万石の侯爵 陸軍大将・前田利為』⁽¹⁰⁾（村上紀史郎 2022）、別荘地に関しては『鎌倉別荘物語 明治・大正期のリゾート都市』⁽¹¹⁾（島本 1993）などの既往研究が挙げられる。鎌倉別邸の創設時期は『前田利為』では明治中期とされ、浪川論文では1890（明治23）年と明記している。調査ではまず第15代当主前田利嗣（1858-1900）の『淳正公年表稿』⁽¹²⁾の記載や前田家近代史料「資産調査報告書」⁽¹³⁾などから創設時期を確定した。⁽¹⁴⁾そしてその後の建築に関しても、本稿ではほかの前田家近代史料から判明した事実を再確認し、当時の設計図面や写真など非文字資料から、復原平面図を作成するとともに、内部意匠の考察に用いている。

② 設計者・渡辺栄治（1896-1977）

『日本近代建築人名総覧』⁽¹⁵⁾（堀 2021）記載の内容確認や関係者聞き取り調査や文献調査や前田家史

料調査を行い、より詳細の経歴を明らかとする。また、渡辺栄治の設計作品については、鎌倉別邸以外の遺構が確認できないため、出版物や前田家近代史料などから、設計作品の図面や資料を調査する。作品は渡辺栄治の建築古写真にも残されており、これらの非文字情報をもとに、渡辺栄治設計の住宅の特徴などを考察し、既発表の拙稿⁽¹⁶⁾に加えて報告する。⁽¹⁷⁾

③ 暖炉廻り

『図説インテリアの歴史』(小泉 2015)や『新版 図説・近代日本住宅史』(内田ほか 2008)や近代初期の暖炉についての関川氏の論考⁽¹⁸⁾などの既往研究があり、暖炉廻りの構成や内部意匠に関しては、鎌倉文学館の現地調査を行い新築当初設計図との照合をした。また、大正期と昭和初期の『建築写真類聚』⁽¹⁹⁾の暖炉写真集などを中心に、博物館明治村へ移築された住宅など現存遺構などを参考として、暖炉の構成の変遷と内部意匠など分析を行う。

I 前田家鎌倉別邸の概要

(1) 近代鎌倉と前田家鎌倉別邸の沿革

古都鎌倉は、明治初期から医師ベルツや長与専斎らにより、海水浴や保養地としての適地として注目されていた。1889(明治 22)年に横須賀線が開通して以降、皇族や華族をはじめとして別荘を持つ富裕層が増加し、その後の住宅地への発展への契機となった。なかでも前田家は、早期に鎌倉に別荘を置いた旧華族であり、第 15 代当主前田利嗣が 1890(明治 23)年に長谷の土地に別荘を創設し昭和戦後まで存続した。とりわけ前田家は皇室との姻戚関係もあり、葉山、鎌倉に皇室の御用邸が出来⁽²⁰⁾る頃までは皇室の行啓が多く、当時の皇太子の旅館としての役割を持っていた。火事や震災などで焼失・倒壊のたびに再建され、1936(昭和 11)年に現在の鎌倉文学館の建物である旧前田家鎌倉別邸が建設された。

(2) 文学館への改修について

1985(昭和 60)年に鎌倉文学館に改修された際には、新築当時の外観(写真 2)がほぼ保存されているとして南面の外観保存を重視し、必要な設備を備えた展示室や収蔵室や衛生関係の諸室は北側、事務室や講義室などは最下階に配置された⁽²¹⁾。建物の南北地盤面に高低差があり、南側地盤が高く、南庭面からは最下層が地面下に隠れて 2 階建に見える。現在は建築基準法に合わせて地上 3 階建と統一しているが建築当初は「鉄筋コンクリート造地下・木造 2 階」⁽²²⁾としており、本稿ではその呼称にて「地下 1 階・地上 2 階建」と呼ぶものとする。⁽²³⁾

現在は文学館として利活用され公開されている(2023 年度より改修準備のため閉館中)。最上階は未公開部分だが、前田家から鎌倉市に寄贈された当時の状況がよく残されている。⁽²⁴⁾

II 設計者・渡辺栄治の経歴と作品について

(1) 渡辺栄治の経歴

設計者・渡辺栄治(1893-1977)について、従来は米沢工業出身で前田家の専属的な建築係という

表1 前田家鎌倉別邸の沿革（『前田利為』及び鎌倉市史より作成）

年	前田家鎌倉別邸の沿革	鎌倉市史概要
1880（明治13）		ベルツ、七里ガ浜を絶賛
1884（明治17）		長与専斎が鎌倉を保養地として評価
1887（明治20）		東海道線の開通 長与専斎が別荘、海浜院を開設
1889（明治22）		横須賀線の開通
1890（明治23）	前田利嗣公が鎌倉長谷に別荘を持つ	
1892（明治25）	英照皇太后・皇太子の行啓	
1894（明治27）		葉山御用邸が建設
1897（明治30）	皇太子行啓	
1899（明治32）	常宮周宮行啓	
1900（明治33）	前田利嗣より前田利為へ相続、大改修が完了	鎌倉御用邸が建設
1909（明治42）	皇后（昭憲皇太后）行啓	
1910（明治43）	鎌倉別邸類焼、再建	『現在の鎌倉』発行
1923（大正12）	関東大震災にて一部倒壊（洞門、本建物の一部）	関東大震災にて壊滅的な打撃
1924（大正14）	鎌倉別邸洋館にて撮影	
1936（昭和11）	鎌倉別邸現在の洋館が建設	
1950（昭和25）頃	デンマーク公使などの貸別荘に利用	戦後GHQなどへの接收が進む
1975（昭和50）	佐藤栄作元首相の別荘に利用	
1983（昭和58）	前田家から鎌倉市へ寄贈	
1985（昭和60）	改修ののち、鎌倉文学館として開館	



写真2 昭和11年当時の鎌倉別邸（『竹中工務店 建築写真集 第4集』より）

以外知られていなかったが、『日本近代建築人名総覧』その他文献及び前田家関係資料や渡辺家聞き取り調査などにより、詳細の職歴や設計作品などが明らかとなった。渡辺栄治は山形県出身で、1911（明治44）年に山形県工業学校（米沢工業）⁽²⁶⁾を卒業後、村井銀行建築部⁽²⁷⁾、吉武長一建築工務所⁽²⁸⁾、明治神宮造営局⁽²⁹⁾、田園都市株式会社⁽³⁰⁾を経て、前田家事務所に建築係として入所⁽³¹⁾、戦後も嘱託として前田家の建築に関わっていた⁽³²⁾。

表2 渡辺栄治の主な経歴と作品

年代	満年齢	経歴	作品（竣工）
1893 明治 26	0	山形県左沢にて誕生	
明治 44	18	山形県立工業学校卒業	
明治 45	19	村井銀行建築部に入社	
大正 4	22	吉武長一建築工務所に移籍	
大正 8	26	明治神宮造営局に入局	
大正 12	30	田園都市株式会社に入社	
大正 13	31		手島重雄邸 中浜東一郎邸 (建築写真類聚 文化住宅 3・4)
大正 15	33	侯爵前田家建築事務所に入所	関谷利次邸 杉田主馬邸 (建築写真類聚 文化住宅 4)
昭和 2	34	前田家事務所主任	
昭和 4	36		(旧前田家本邸洋館)
昭和 7		服部金太郎新築事務所	
昭和 8	40		旧前田利建邸 (竹中工務店 建築写真集)
昭和 9	41	侯爵前田家嘱託 (日本建築学会会員名簿)	
昭和 11	43		鎌倉別邸（現存）
昭和 13	45		旧内藤政道邸 (竹中工務店 建築写真集)
昭和 16	48	前田侯爵家嘱託 (日本満洲支那土木建築名鑑)	
昭和 52	84	没	

(一時的な所属先を除く)

(2) 渡辺栄治の作品

現存が確認できるものは前田家鎌倉別邸のみだが、渡辺栄治の設計作品は雑誌『建築写真類聚』や『竹中工務店 建築写真集』などの出版物で設計作品7棟が確認できた。田園都市株式会社時代には、中浜東一郎邸などの高級な中流層の住宅を4棟と、前田家事務所入所以降では、鎌倉別邸、前田家世子邸（前田利建邸・1933（昭和8）年・写真3）、内藤子爵邸（内藤政道邸・1938（昭和13）年・写真4、いずれも竹中工務店施工）と旧華族の上流層の住宅を設計している。⁽³⁴⁾ 渡辺栄治の経歴と作品のまとめを表2に示す。

渡辺栄治の設計と判明したものは少数で、外観は複数の屋根を交差させて変化に富む屋根や平面的に凹凸が多く立体感のある外壁面という点で鎌倉別邸と共通点がみられる。内部は当時の設計図や『建築写真類聚』掲載や、渡辺家古写真及び内藤家古写真など、居間や客間といった主要居室の暖炉廻りの写真が多く残されており、渡辺栄治の特徴を示すと考えられる。が、これまで存在が明らかでなく位置付けができていなかった。

そこで次章では、まず日本の近代における暖炉廻りの変遷について、現存する遺構と写真集から分析を行い、その分析で用いたモデルをもとに、鎌倉別邸の暖炉廻りの内部意匠について論じていきたい。



写真3 前田家世子邸 (1933)



写真4 内藤政道邸 (1938)
『竹中工務店 建築写真集』(第3集・第4集)より

Ⅲ 日本近代の暖炉廻りの変遷について～現存遺構と写真集の分析～

(1) 暖炉の基本的な構成

暖炉に関する文献はインテリアや設備として取り上げたものが多い。ここではインテリア史の第一人者である小泉博士の近著『図説 日本インテリアの歴史』(小泉 2015、以下『図説』とする)に記載の「マンテルピースの構成」⁽³⁵⁾を参考として暖炉廻りの分析を行いたい(図2)。

暖炉は、火を焚く火箱部分と煙突からなり、火箱の周囲の装飾枠はマンテルピースと呼ばれる。暖炉の構成として、マンテルピース(以下、MPと略す：暖炉上部の水平柵で燭台や置物なども置かれるマンテルシェルフ(以下、MSと略す)より下方の部分)とその上部のオーバーマンテル(以下、OMと略す)が知られる(図2)。MPは、ピラスター(火箱の両脇の柱部分)、フリーズ(ピラスターで支持される火箱開口部上部の水平材部分)、スリップ(火箱開口部両脇の垂直部材)などが知られる⁽³⁶⁾。また意匠としては、OMやMPのフリーズ・スリップの装飾様式があるが、部屋ごとに異なる様式が採用されることも多い。後年ガスやスチーム等の煙突や煙道を持たないマンテルピースだけの暖炉も出現したが古写真からの判別は難しいため、本稿ではマンテルピース形状から「暖炉」とする。更に、各部の細部装飾の様式ではなく、室内の内装仕上や鏡や照明器具や建具といった装置などを含めた暖炉廻りを構成する要素に注目した。

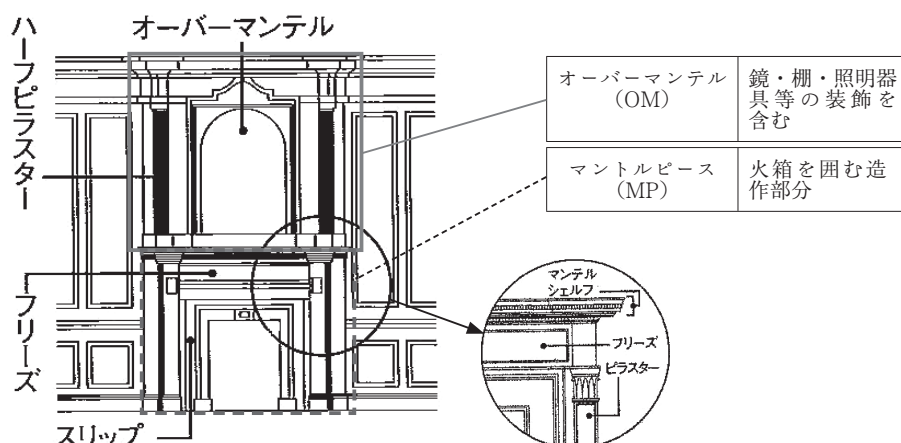


図2 暖炉の構成(『図説 日本インテリアの歴史』より抜粋及び追記)

(2) 日本近代における暖炉の普及

① 西洋建築の導入に伴う暖炉の普及

明治期に日本に西洋文化が入ってきた当時、西洋の住宅・インテリアは欧米自体がまだ近代の様式の模索期であったため、様式的には過去の様式を用いた歴史主義であった。その後明治末以降になると、アール・ヌーボー、セセッション、アール・デコ、と欧米から新しい様式が入り、工業生産に基礎を置くバウハウスに至り、やがてモダンデザインへ移行した。住宅でいえば、明治期は宮殿や上流層で本格的な洋館が建設され、大正期にはそれが中流層へ移行し、いわば「高級中流住宅」が流行した。それまでの重厚感や華美な装飾性というものを排除したデザインが主流となった。大正期から昭和初期には、スパニッシュ様式の住宅が流行し、1925年パリ博以降は、アール・デコ様式が入ってきた。さらに、モダニズムの影響を受けた住宅や、一部の財界人や文化人の間では近代数寄者による近代和風住宅が広まったという背景があり、インテリアについても同様と捉えられる。⁽³⁷⁾

② 導入期の暖炉について

『図説』によれば、暖炉は比較的高い緯度の西欧で発達したもので、はじめは住宅の中央に簡素な石板や粘土で造られた炉で煙突はなく窓から排煙していた。英国では11世紀に炉が壁へ移動し現在一般的な壁付暖炉（fireplace）となった。煙突が使用されるようになったのは12世紀以降で、13世紀には一般化、14世紀頃から暖房燃料として石炭が使用されるようになり排煙の必要性が増したため、小規模な住宅にも設置されて大衆化したとされる。暖炉は、欧米では暖房以外に調理や燻製作りにも利用され、暖炉廻りで過ごす機会が増えて次第に部屋を中心に、「室内の格式を表現する要素として装飾されるようになった」と⁽³⁸⁾とされる。

暖炉は西洋建築の導入に伴い日本に導入された。最初期のものは、長崎・神戸・横浜などの外国人居留地に建てられた外国人住宅であり、その代表に旧グラバー邸（旧グラバー住宅：1863（文久3）年、重要文化財、長崎県）などがある。「近代日本の住宅における暖炉の導入とその展開に関する研究 その1——外国人居留地に建設された住宅における暖炉の様相——」⁽³⁹⁾（関川 2018）の研究では、長崎・神戸の六つの外国人居留地の住宅について、暖炉の立面の数型を模式化し、平面や暖炉の意匠の形態などを分析している。西洋式の住宅が導入され始めた頃、江戸時代末期の住宅では、大鏡を配した装飾的暖炉が客用の共用空間に配置されていたが、明治期に入ると大鏡を配した装飾的な暖炉は見られなくなり、明治後期になると、大鏡ではない棚等の装飾を持つ暖炉が出現したとして、暖炉の形式の変遷に注目して日本における明治期の西洋館の流れを紹介している。関川氏は、これらの外国人住宅でも一棟の住宅内に複数の暖炉があり、その様式は一樣ではなく室ごとに異なる場合がある点を指摘している。そこでは、私的空間と共用空間で暖炉の意匠には差がないとしているが、それ以降の住宅の変遷に関しての考察はみられていない。

(3) 暖炉廻りの変遷と和洋折衷型の登場

① 明治中期以降の暖炉廻り

『図説』及び日本住宅史の流れをまとめた「近代日本住宅図譜」⁽⁴⁰⁾から代表的な住宅を取り上げて年代順に示す（表3）。西洋建築が導入された時期を「導入期」とする。その後、上流層を中心に西洋館の建設が進む中、1881（明治14）年の赤坂仮皇居御会食所や1888（明治21）年の明治宮殿でも書

院造の居室に暖炉が導入された。⁽⁴¹⁾また、旧清水組（現清水建設）の第4代技師長岡本鑒太郎⁽⁴²⁾（1867-1918）が1898（明治31）年に提案した「和洋折衷住家の地繪圖に就て」⁽⁴³⁾で示した住宅では、畳敷の和室に壁付暖炉が設置されており、明治中期以降には皇族以外の住宅にも和洋折衷型のものが出現していた。そこで、導入期から建設されてきた西洋館での暖炉を洋風型、暖炉の周囲に畳・襖・障子・床の間・書院など和風の要素で構成された暖炉を和洋折衷型の暖炉として区別し、畳や床の間などの和風要素は暖炉本体の装飾でなく、これら構成要素を含め、暖炉廻りとした。

これら和洋折衷型の暖炉廻りはいずれも畳敷の和室に暖炉が設置された事例であり、『図説』でも1906（明治39）年の旧高取伊好邸の書斎、旧芝川又右衛門邸の座敷の2例が挙げられる。なお、先の岡本鑒太郎の図では、該当住宅が木戸孝允邸（明治29年）と金子堅太郎邸（同30年）とみられる⁽⁴⁶⁾ことから、明治中期頃には宮殿以外の上流層の住宅にも、和室を中心とした和洋折衷型の暖炉廻りの空間が存在していたといえる。

表3 住宅の暖炉廻りの形式

（〈非現存〉写：写真）

時代	〈洋風型〉	〈和洋折衷型〉
導入期	旧グラバー邸（1863・文久3）	旧赤坂仮皇居御会食所（1881・明治14）
明治初期	旧西郷従道邸（食堂）（1880・明治13、写5）	〈明治宮殿 1888・明治21〉
明治中期	旧岩崎久弥邸（1896・明治29）	〈旧木戸孝允邸 1896・明治29〉
	旧渡辺千秋邸（1905・明治38）	旧高取伊好邸（書斎・寝間）（1906・明治39、写6）
明治後期	旧松本健次郎邸（1910・明治43）	旧松本健次郎邸（和室）（1910・明治43）
	旧芝川又右衛門邸（洋間）（1911・明治44）	旧芝川又右衛門邸（座敷）（1911・明治44、写7・8）
大正期	旧山邑邸（1923・大正12）	旧久邇宮邸（小食堂）（1918・大正7） ⁽⁴⁷⁾
昭和初期	旧小笠原邸（1927・昭和2）	
	旧前田家本邸洋館（1929・昭和4）	
	旧朝香宮邸（1933・昭和8）	
	旧マッケンジー邸（1940・昭和15）	
		
	写真5 西郷従道邸 食堂	写真6 高取邸 書斎 (筆者撮影、2022)

② 和洋折衷の暖炉廻り

明治中期以降大正期までの現存遺構における和洋折衷型の暖炉廻りを持つ住宅では、建物内に別に洋間に存する洋風暖炉があり、洋風と区別して和室中心の和洋折衷型の暖炉を持っていた。旧高取邸では明治期に二つの和室中央に暖炉を設置し、大正期に洋間を増築したため、和洋折衷と洋風両方の様式の暖炉廻りが存在する。また、旧芝川又右衛門邸では、洋室にも和室にも暖炉が設置されているが、和室の暖炉は襖で収納された埋込式で、主に冬場に暖房器具として利用されたと考えられる（図



写真7 旧芝川又右衛門邸 洋間（筆者撮影、2022）

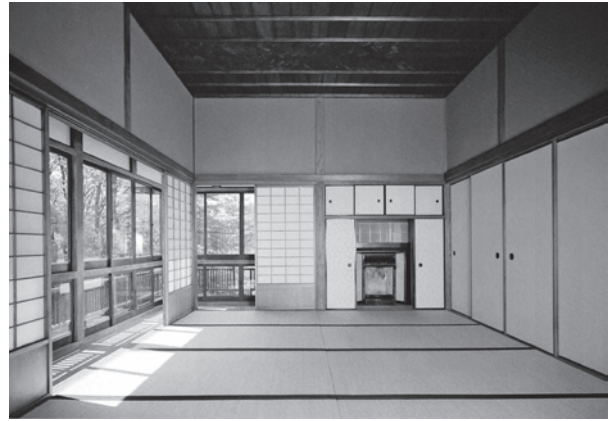


写真8 旧芝川又右衛門邸 2階座敷
（『明治村建造物移築工事報告書 12 集 芝川又右衛門邸』より）

7・8)。なお、これらの遺構ではいずれの暖炉も壁付で暖炉の上方に掛軸などの装飾や天袋が設置され、いわゆるオーバーマンテルがない暖炉の形式となる。現存遺構が希少で種別などの不明点が多いため、当時の文献からも確認していきたい。

（4）大正期・昭和初期の「暖炉」をテーマとした写真集

国立国会図書館蔵書の写真集目録から、「暖炉」で検索したところ、暖炉をテーマとする写真集は3件で、『建築写真類聚』として出版された雑誌『暖炉 巻一』（1921（大正10）、以下「巻1」とする）・『暖炉 巻二』（1922（大正11）、以下「巻2」とする）・『暖炉前の構成』（1933（昭和8）、以下「暖炉前」とする）であった。単体での暖炉の写真掲載はほかの雑誌でも見受けられるが、明治期から昭和戦前まで、「暖炉」を中心に上げた写真集はほかに確認できておらず、同時期に同条件で多数の事例が得られることから、写真集の事例を丸ごと調査対象とする。『建築写真類聚』は各50枚が既定数量であり、上記3冊にはそれぞれ50を超える事例の暖炉の写真が収録されている。「巻1・2」は連続年の発行で連続した通し番号があるため、一体として考えた。巻1・2では118例、「暖炉前」には96例の暖炉の写真が掲載されている。また、「暖炉前」には撮影場所や設計者及び写真の解説が記載され、「本書は主として独奥仏英米各国に於ける暖炉の最新形態を抜粋掲載したもので、暖炉の意匠が室内機構の中心点であることは、恰も床の間が日本座敷の構成に於けるがごとくである⁽⁴⁸⁾」とあり、当時暖炉の意匠が室内空間の中心として捉えられていたことや、「設計者」が記され、大正期にはなかった設計者の認識が昭和初期に編集者側に生まれていたと推察できる。当時の日本の暖炉をまとめた事例の写真集は確認できないため、これらの写真から、大正期と昭和初期の欧米など海外で流行していたとみられる暖炉廻りの傾向について分析した（表4）。

その結果、暖炉廻りの形態は、大きくいくつかのタイプに分けられると考えた。①壁付か埋込式か設置方法で大別し、②オーバーマンテルかどうか、鏡や棚を持つ典型的な装飾的暖炉をOM、マンテルシェルフ部分の高さをOM範囲まで拡大させた暖炉をHM、オーバーマンテル無しの非装飾暖炉をMS、③マントルピースの装飾の有無、④背面壁装飾の有無、である。また、昭和期は室名別にて暖炉の構成の分類を行った。

写真集に見られる暖炉の構成について比較したところ、前者ではほとんどが壁付型で、そのうち約

表4 暖炉をテーマとした写真集掲載の暖炉の傾向

名称 (例)	室名	設置方法			オーバーマンテル OM					マントルピース MP			備考
		壁付 W	埋込 I	独立 S	OM 典型	OMH (高)	OML (照)	UOM 無し	BD 壁装飾	MPD 柱梁 装飾	MSW 幅広	MP 他 MS	
巻1 (64) 巻2 (54)	(118 例)	110	8	0	52	40	26	0	14	44	74	14	OM の 26 例 が鏡付
		118			118					118			
暖炉前 (96)	居間 (51)	28	18	5	8	10	8	26	4	23	5	23	居間に独立型 出現、埋込 型・OM無し 型の増加
	広間 (10)	7	3	0	2	1	0	7	2	3	1	6	
	書斎 (6)	3	3	0	1	4	0	1	3	2	1	3	
	食堂 (3)	2	1	0	1	1	0	1	1	0	2	1	
	他 (26)	19	7	0	3	5	3	15	2	6	7	13	
	合計	59	32	5	15	21	11	50	12	34	16	46	

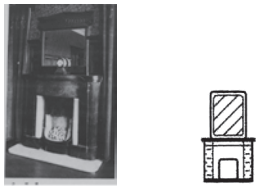

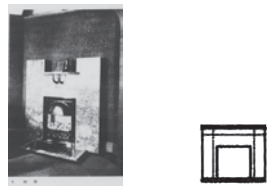
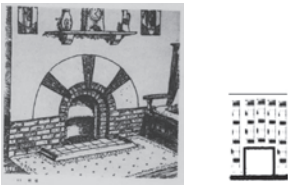
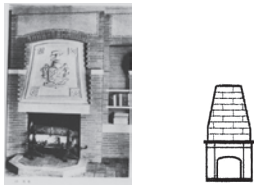

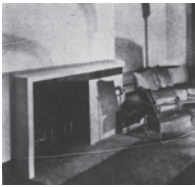


		
壁付 W 典型的装飾暖炉 OM MPD 装飾 (「巻1」 3)	壁付 W OMH (内法高) MP 装飾無し (「巻1」 12)	壁付 W 非装飾的暖炉 MS (「巻1」 1)
		
埋込式 I OM (「巻2」 63)	壁付 W 装飾的暖炉 OMH (内法高) (「巻2」 59)	埋込・半埋込式 I UOM OM 無し (「暖炉前」 4)
		
埋込式 I UOM OM 無し (「暖炉前」 4)	独立式 S UOM OM 無し (「暖炉前」 6)	壁付 W MSW (幅広) (「暖炉前」 33)

図3 概略図

(網掛は「巻1・2」)

半数が OM を持つ暖炉、次に内法高まで高い位置まで OM 暖炉を造作する形式 (HM) が多く、非装飾的暖炉は OM の半数であった。また、マントルピースの装飾も、非装飾の方が多数で、背面の壁を装飾した例 (BD) も1割ほどであった。一方、後者では壁付が6割ほどで埋込が3割と増加、典型的な装飾型が減少、OM 無しが増加、MP の装飾は全般的に減少の傾向がみられた。

(5) 大正期の「床の間」をテーマとした写真集

『建築写真類聚』には、大正期に床の間をテーマとした「床の間集」が6巻発行されている。岡本

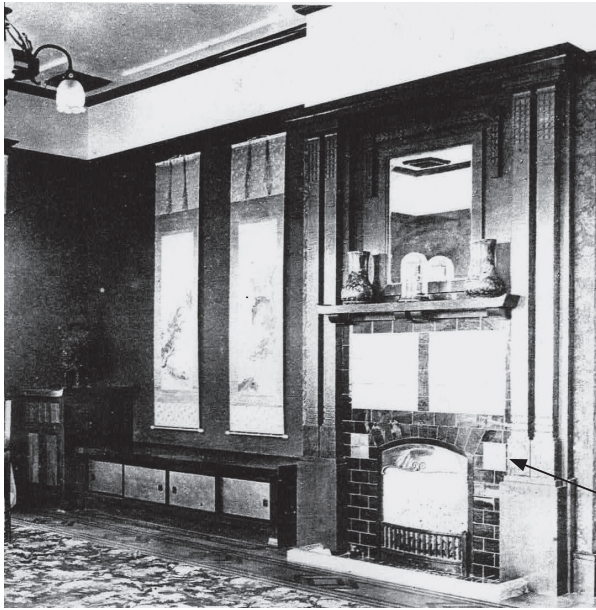


写真9 青木鉄太郎邸 客間（『床の間集 巻一』より）



写真10 中村歌右衛門邸（『床の間集 巻二』より）

暖炉

鋆太郎の提案図の座敷に暖炉と床の間が併設されていたことから床の間に注目したところ、『床の間集』全6巻（300事例）の中から、床の間に暖炉が隣接した事例2例が確認できた。第1巻（1920（大正10）年）の青木鉄太郎邸（客間・写真9）⁽⁵⁰⁾と第2巻（1921（大正11）年）の中村歌右衛門邸（写真10）⁽⁵¹⁾である。

①青木鉄太郎邸 客間

床は寄木張でテーブル・椅子などの洋家具が置かれ、洋室とみられる。床の間と暖炉上の水平材を同じ高さに統一させて水平線を強調している。

②中村歌右衛門邸

明治から大正にかけて女形で活躍した歌舞伎の第5代中村歌右衛門邸。1915（大正4）年から1918（同7）年頃千駄ヶ谷に新築した。『五代目歌右衛門自伝』によると、設計は近代数寄者の高橋箒庵⁽⁵²⁾とされる。

この2例の暖炉廻りを比較すると、双方とも、床は寄木張／石タイル貼、暖炉前面は煉瓦やタイル貼で、床の間の脇に設けられている点が共通する。青木邸は床の間は椅子座に合わせた膝丈の高さで、暖炉は鏡や高い位置の棚がある装飾的な暖炉である。それに対し、中村邸は、左から床の間・地袋・暖炉・床脇と並んだ暖炉廻りであり、天井は格天井となっている。伝統的な和風要素が強いが、床は板張りで床の間の落とし掛と同じ高さに長押を設置して暖炉の壁としている和洋折衷型である。

（6）大正期・昭和初期の暖炉廻り

暖炉写真集の分析から、大正期には非装飾的な壁付暖炉が増加し、昭和初期では海外を埋込や半埋込として壁面と一体になるように装飾を排除するようなモダンなデザインが広まってきたこと、長く主流であった壁付暖炉から壁に埋込むモダンな設置方法が出てきたことや、暖炉の前飾装飾が拡大してそのまま壁面の意匠となったと考えられる。また、背面壁や脇壁などと融合した内部意匠の一つと考えた暖炉や、装飾を排除したシンプルでモダンな形態の暖炉が生まれ広がってきたとみられる。一

方、床の間を中心とした伝統的な和室では、大正期に和室への暖炉を組み込んだり暖炉を構えた洋室の一部に床の間と暖炉に隣接させた和洋折衷型とした事例など、少数ながら多様な形態が試行されていたことがうかがえる。このことから、暖炉単体だけでなく暖炉廻りとして分類モデルとして考察した（図4）。設置方法による分類（壁付・埋込・独立）と、オーバーマントルの装飾の有無、マンテルシェルフの長さや端部のデザインや設置高さ、マントルピースの装飾の有無などにより、さらに細分類が可能と考えられるが、ここでは室内構成の一要素と捉え、より簡潔な形式で示す。

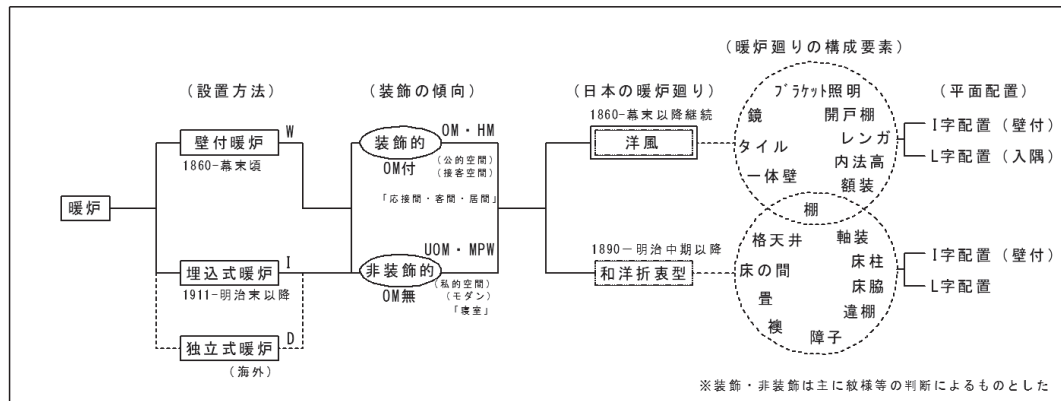


図4 暖炉廻りの構成の分類

(7) 住宅様式と暖炉廻りの変遷過程について

戦前までの暖炉廻りについて日本近代住宅の様式の変遷と合わせてまとめた（表5）。

表5 近代日本住宅（戦前期）の暖炉廻りの変遷

(●現存○非現存)

項目	1860 幕末～明治初期	1880 明治中期	1900 明治後期大正前期	1920 大正後期・昭和初期
様式	外国人居留地外国人住宅 バンガロー ペランダコロニアル	下見板コロニアル ジャコビアン ルネサンス 和洋折衷	アールヌーボー ゼセッション ハーフティンバー あめりか屋 和洋折衷	スパニッシュ ライト式 モダニズム 新興数寄屋 チューダー アールデコ 和洋折衷
上流	洋館	洋館／和館		
中流		洋風化		住宅改良会
代表的住宅	●グラバー邸 ●西郷従道邸 ●新島襄邸	●岩崎久弥邸 ●ハンセル邸 ●赤坂仮皇居御会食所 ○明治宮殿	●松本健次郎邸 ●高取邸 ●芝川又右衛門邸 ●渡辺千秋邸 ○青木鉄太郎邸 ○中村歌右衛門邸	●山邑邸 ●小笠原邸 ●朝香宮邸 ●前田家本邸 ●前田家鎌倉別邸
暖炉廻り				

IV 鎌倉別邸の暖炉廻りについて

(1) 鎌倉別邸の平面と暖炉の所在と配置について

鎌倉別邸には当初の主要居室7か所にそれぞれ暖炉（構え）があった。新築時の「設計図」で確認したところ、女中らの生活空間であった地下1階には暖炉構えの表記はなかった。新築当時の設計図を確認し復原した当時の1・2階平面図（復原平面図・図5）を作成し、暖炉の所在箇所を示す。平面は、各階とも、東西を軸とする中廊下型で、南に主要居室、北側に使用人室や台所などのサービス部分、東西の端に浴室やトイレなどの水回りを配置している。

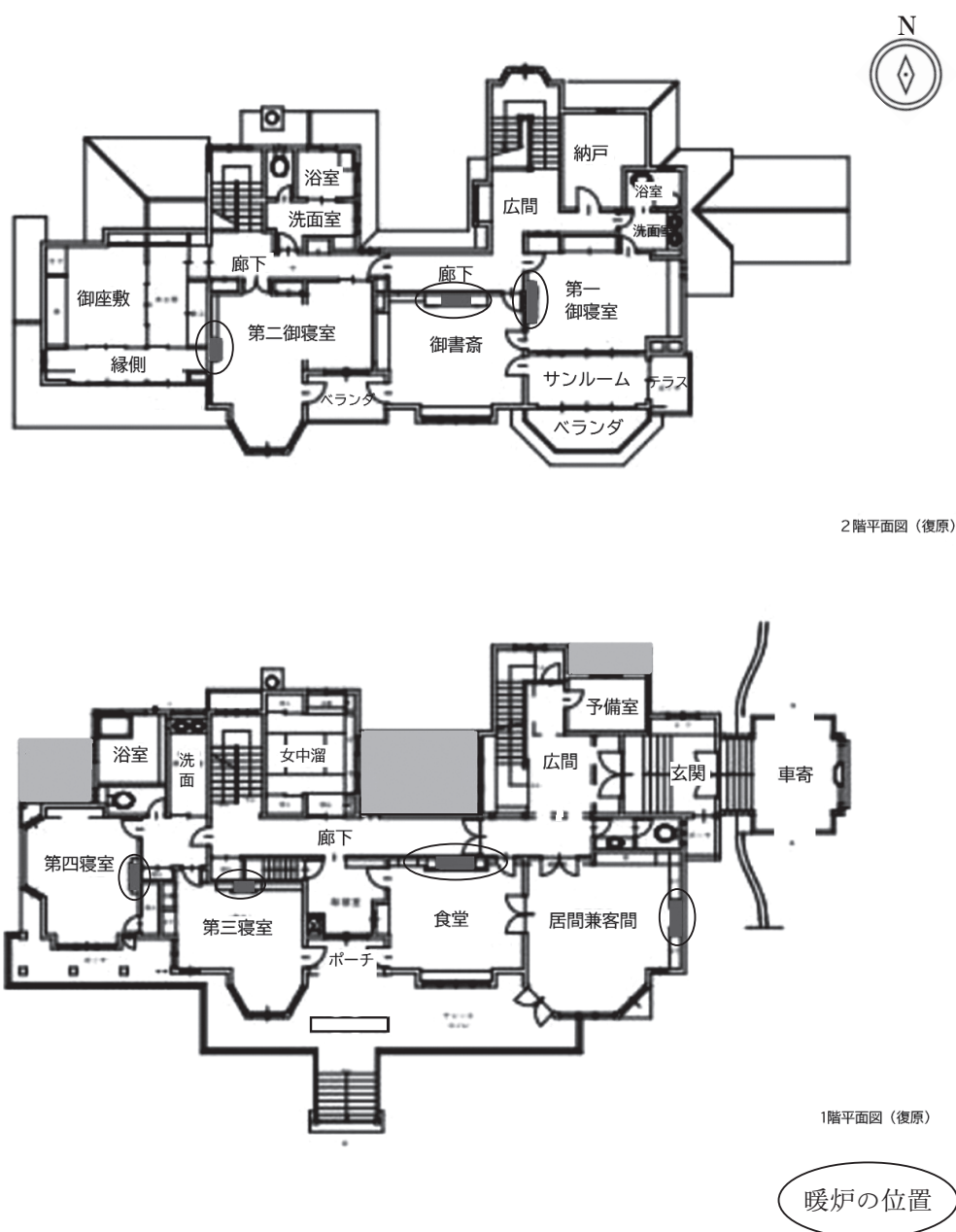


図5 鎌倉別邸 復原平面図及び暖炉配置図

表6 鎌倉別邸の暖炉の構成

番号	室名	設置型	型	設置方位	オーバーマンテル OM	マンテルピース MP	MSW	ほかの構成要素	タイプ
①	居間兼客間	壁付 W	装飾的 OM	東（外壁側）	鏡 m	面	W2 ツ	天袋・戸棚（脇） 床の間（L字）	MP
②	食堂	壁付 W	装飾的 OM	北（廊下側）	照明 L	面	W2 ツ	—	MP
③	第三寝室 （非現存）	壁付	非装飾的 MP	北（廊下側）	×	面	W1 ト		MP
④	第四寝室	壁付	非装飾的 MP	西（外壁側）	×	面	W3	—	MP
⑤	第一寝室	壁付	装飾的 OM	西（内壁側）	鏡 m 照明 L	面	W1	—	OM
⑥	書斎	壁付	装飾的 OM	北（廊下側）	戸棚 S	面	W1 ト	戸棚（脇） 床の間（L字）	MP
⑦	第二寝室	壁付	非装飾的 MO	西（外壁側）	×	面	W3	—	MP

(2) 鎌倉別邸の暖炉の構成

これら鎌倉別邸の暖炉の構成について、前章と同様、暖炉の構成をまとめた（表6）。なお、マンテルシェルフの幅は暖炉幅 W1 を基準として、左右に1割程度延ばしているものを W2、カウンターのように左右に水平に倍以上延ばしているものを W3 とした（シェルフ端部を上方へツノのように曲げているツノ出しとするものを「ツ」、角を止めているものを「ト」とし、端部を水平に延ばしたままのものは下線を引き区別）。

表からみると、鎌倉別邸の暖炉はすべて壁付であり、MP は非装飾的であり、大理石やタイル貼で造作されている。MS の端部は居間兼客間・食堂が「ツノ出し」で書斎と第三寝室が「トメ」で、第二寝室と第四寝室は MSW の伸長型という3パターンを取っていることがわかる。

(3) 内観の特徴

内観の意匠は、玄関・広間などの柱や梁など木部現わしとなる箇所は、チョウナはつりとして荒々しさを表現しているが、居間兼客間・食堂や寝室などは優美さを備えたアールデコ風の照明や日本趣味的な建具など異なった建築様式が混在している。客間兼居間、食堂、書斎、寝室の7つにはそれぞれ暖炉が設けられ、暖炉廻りには、ブラケット照明や風景画、ステンドグラスなどが装備されている。とりわけ、居間兼客間と書斎は天井や照明器具が格天井や大引天井で、伝統的な和風建築の要素を持つ。さらに両室では、平面的に床の間と暖炉はL字配置で構成されており、書院造の座敷飾の構成要素（床の間・床脇・違棚・書院）に似た構成となっている。

竣工写真と当初の設計図から、暖炉廻りに注目して室内の仕上げと構成要素をまとめた（表7）。その結果、居間兼客間と書斎のみ、寄木張の床や暖炉など洋室の要素に、格天井や網代天井、さらには障子・襖といった伝統的和風住宅の要素が混在していることが明らかとなった。

(4) 各所暖炉廻りについて

鎌倉別邸では、新築当時の古写真に家具が写り込んでおり、家具配置が想定できる。そこで、内部意匠の考察のため、古写真からこの家具の配置を概ね平面図に落とし込み、暖炉と家具配置との位置

表7 竣工写真にみられる鎌倉別邸の暖炉周りの仕上げ要素

(階数は当時)

階	室名称	暖炉	暖炉廻り要素					脇壁	床・壁・天井	和建具	備考
		主材質	OM	MP	MPW	SG	SH				
1	居間兼客間	大理石	▲	—	ツ	円	吊	床の間	寄木張・壁紙・格天井	障子・襖	L字配置 和風照明
	食堂	大理石	○	●	—	欄	ガ	装飾棚	寄木張・壁紙・大引天井	—	—
	第三寝室 (非現存)	大理石	○	●	—	欄	戸	アーチ窓	寄木張・壁紙・漆喰 {円状折上}	—	—
	第四寝室	大理石	○	●	—	欄	違	六角窓	寄木張・壁紙・漆喰	—	—
2	書斎	大理石	○	●	—	欄	ガ	床の間	寄木張・壁化粧板・大引網 代天井	障子・襖	L字配置 和風照明
	第一寝室	大理石	●	—	—	側	—	—	寄木張・漆喰・楕円状折上	—	鏡
	第二寝室	タイル	—	●	●	側	戸	小窓	寄木張・壁塗装・漆喰 (勾配)	—	—

※暖炉要素、SG：ステンドグラス、円：円窓、欄：欄間、SH：棚、吊：吊戸棚、ガ：ガラス戸棚、戸棚：戸、違：違棚、ツ：端部ツノ
だし

※網掛け：伝統的和風住宅の要素

関係を確認した。さらに主な居室については、平面図では伝えきれない高さ関係を明確にするため現地調査により展開図を作成した(写真11・12及び図6・7、暖炉上の点線は絵画の鏡・額装位置)。

① 「居間兼客間」

新築時の写真(写真11)と現況展開図(図7)をみると、北面左手に床の間(椅子座に合わせて膝高となっている)、東面正面に障子・暖炉・天袋・違棚、とL字に配置された構成や位置関係は、当時の写真とほぼ同様で、当時の状況をよく残しているといえる。当時の設計図とも比較したところ、



写真11 鎌倉別邸「居間兼客間」(昭和11年当時)
(『鎌倉文学館 収蔵御コレクション』より抜粋)

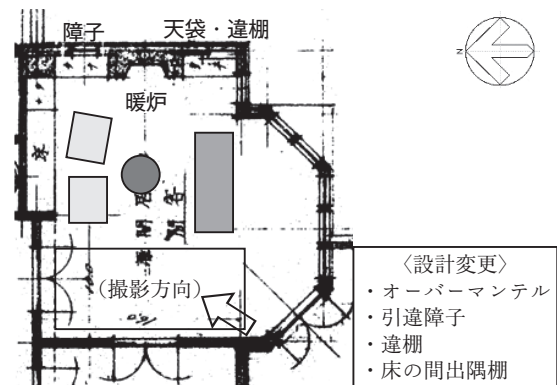


図6 設計図「居間兼客間」平面図

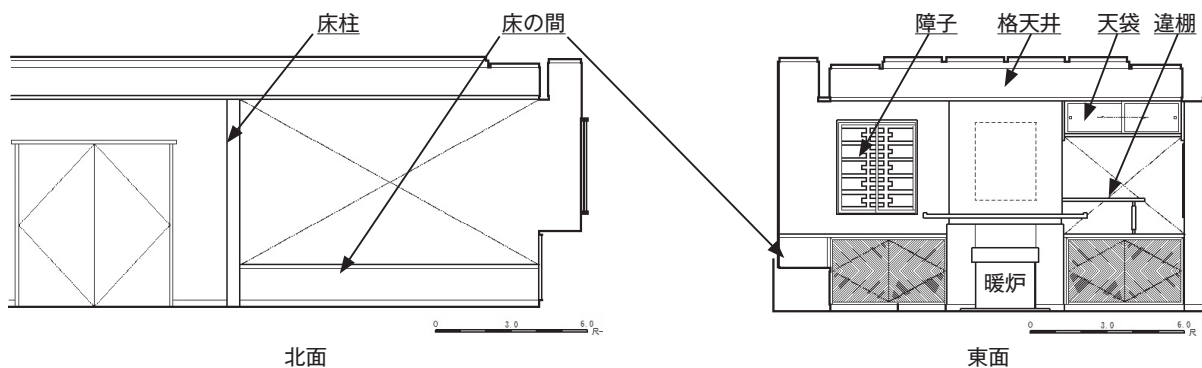


図7 「居間兼客間」暖炉廻り 現況展開図(北面・東面の一部)



写真12 鎌倉別邸 2階書斎（昭和11年当時）
（『鎌倉文学館 収蔵コレクション』より抜粋）

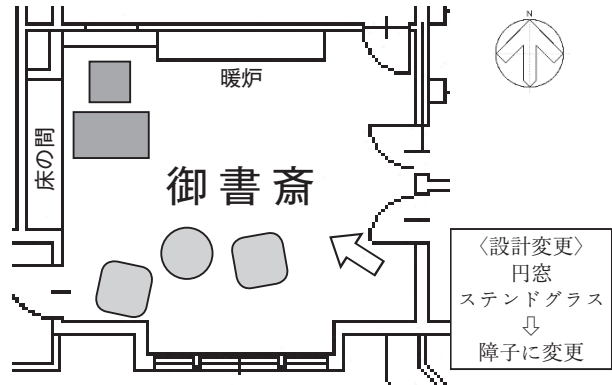


図8 「御書斎」概略平面図

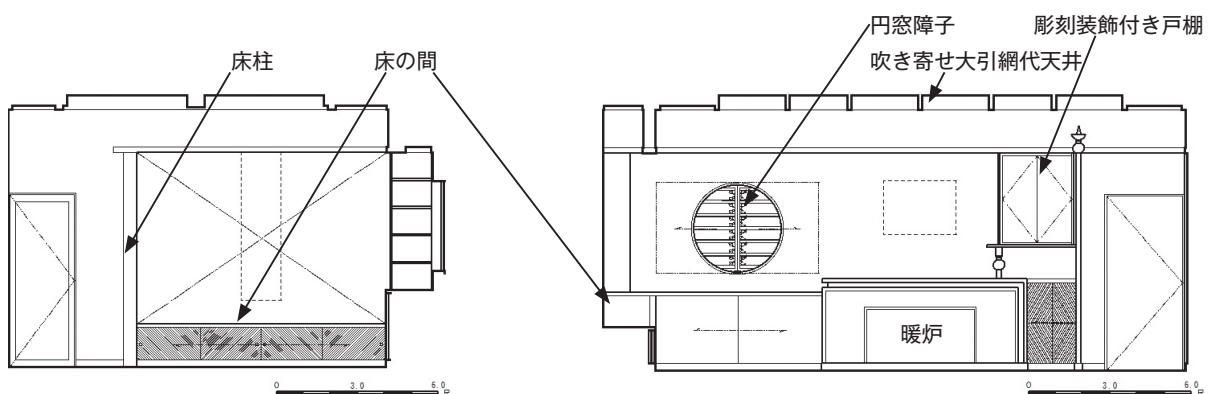


図9 「御書斎」暖炉廻り展開図（西面・北面）（作成）

オーバーマンテルの曲線的なラインの輪郭の鏡（建設当時の写真になし）や、L字配置の出隅部分の棚などの変更点がみられるが、暖炉脇の南側の戸棚の右手のステンドグラスの円窓は当初からの配置である。床の間・障子（書院）・違棚は伝統的な書院造の座敷飾の要素と似た構成で、襖や東洋風のガラス障子や格天井などの和風要素と、暖炉と戸棚や寄木フローリングなど洋風要素やそれらをL字に組み合わせた構成（以降、「L字配置」とする）を持っている。

② 書斎

書斎も、床の間と暖炉がL字型に併設された点では「居間兼客間」と同様である。天井が吹き寄せの大引天井で間に網代張、日本風の組子意匠が引き分け障子の円窓、床の間地袋は木製引違、セセッション風の彫刻装飾が附属した硝子戸棚など、和風と洋風要素が混在している。床の間廻りは、伝統的な書院造の座敷飾（床の間・床脇・書院）の要素から構成されている。

暖炉本体の形状は左右非対称で、暖炉の右に戸棚、左に窓（書院）という位置関係と暖炉の左手に床の間を置くL字配置は、居間兼客間と同様である。いずれも、暖炉上方壁には風景画の額装、床の間には掛軸が飾られている。

③ 食堂

①②以外（食堂以下）の部屋には床の間は附属していない。暖炉はわずかに左右非対象の大理石製で、マンテルシェルフ上の右端に照明スタンド（固定）を設置、照明器具はペンダントと同様にアールドゴ風の意匠で、4周の内法壁をチーク板パネル張として優雅さを表現している。

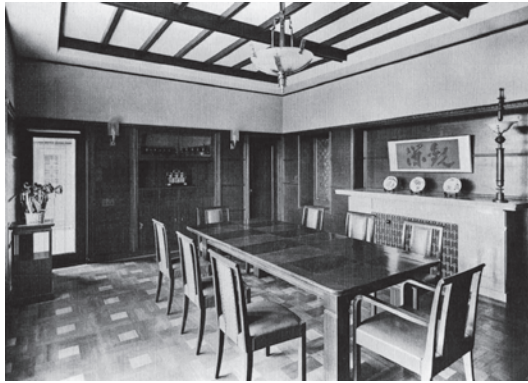


写真 13 鎌倉別邸 食堂（昭和 11 年当時）
（『鎌倉文学館 収蔵コレクション』より抜粋）

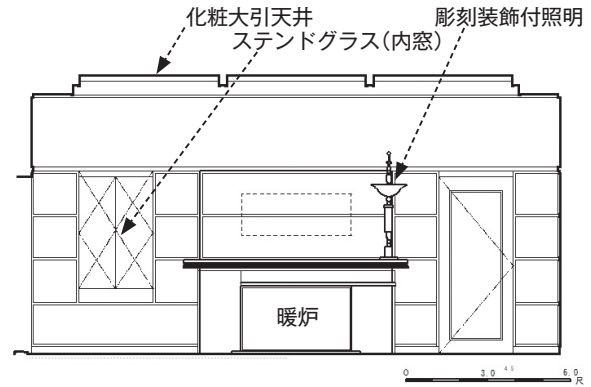


図 10 「御食堂」暖炉廻り 展開図（北面）（作成）

④ 寝室（第一・第二・第四）（第三は解体）

室名称では「寝室」であるが、当時の写真などから、第一は主寝室、第二は主人（侯爵）居室、第三・四は子ども室の用途として利用されたと考えられる。また、第一・第四寝室の撮影位置では暖炉は写真に投影されていない。双方とも、平面図ではベッドの足元側に暖炉が位置していることがわかる。

第一寝室の暖炉廻りは、オーバーマンテルの装飾や棚や窓がなく簡略化された形態だが、楕円型の漆喰折上天井やドアの曲線的な意匠が表現されている。鎌倉別邸には「夫人室」という名称の部屋はなく、この寝室が夫人室の用途を兼務していたと考えられる。

第二寝室は、唯一の舟底天井で、コーナータイルを施すなどほかの寝室と比較してもとりわけ、拘りのある趣味的な意匠が感じられる。暖炉廻りは、左右で高さの異なる棚を配置し、左手の低い棚側には窓がある。右手から、棚・暖炉・窓の順は、「居間兼客間」「書斎」「食堂」と同様である。オーバーマンテル装飾は現在は失われているが、当時の写真に照明器具が 2 灯設置されている。

第四寝室は、暖炉背後の壁が後退して左右非対称の造作棚が設けられている。棚の一部にはセセッション風の幾何学模様の彫刻が施され、部分的に細かい装飾を採用していた。

⑤ 鎌倉別邸の主要居室の暖炉廻りと内部空間について

鎌倉別邸においては、居間兼客間と書斎の暖炉廻りは、「床の間」と「暖炉」の間に障子が入り、天井と照明器具が伝統的な和風である点が共通している。暖炉のシェルフの長さや棚の位置や開口部の形状など細部の意匠は差異があるものの、暖炉側壁面のブラケット照明が片側 1 台で床の間が L 字配置で障子や襖などの和風建具を持ち、格天井や大引天井など伝統的和風住宅の要素を有していることがわかる。これらの部屋は、「床の間」と「格天井」が示すように、より格式が高く、かつ、それぞれの階で家族団らんや接客空間としても中心的空間であることを示していると推定される。床の間 1 か所だけでなく、格天井や襖・障子等の建具や照明器具を含め、視界に入る 3 か所以上の和風要素を分散配置している点、さらには暖炉と床の間を並列でなく L 字配置に構成することや和風要素と水平面の強調などで和風と洋風の要素をバランスよく分散し内部空間として調和していることがうかがえる。また、洋風の暖炉廻りにも「暖炉・棚・窓」という 3 点の構成要素がみられ、「床の間・違棚・付書院」という伝統的な座敷飾のような構成が確認できる。

明治中期から大正期までの和洋折衷型の暖炉廻りの空間は和室の座敷飾の一つとして暖炉が設置さ



写真 14 第一寝室（東面）（昭和 11 年当時）

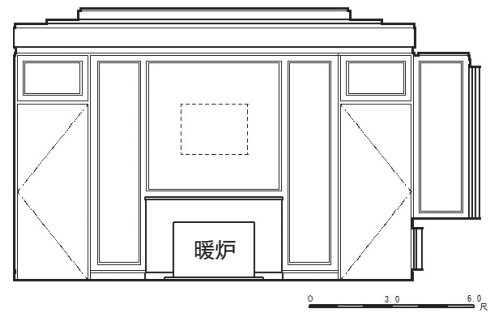


図 11 「第一寝室」暖炉廻り 展開図（西面）（作成）



写真 15 第二寝室（昭和 11 年当時）

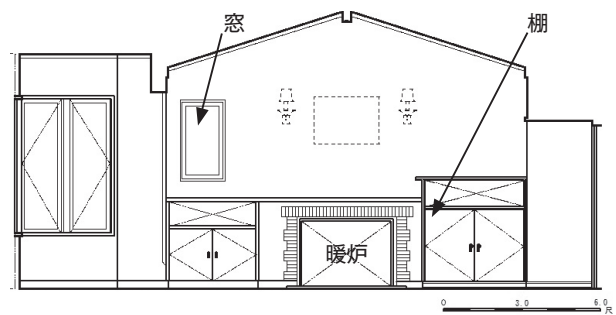


図 12 「第二寝室」暖炉廻り 展開図（西面）（作成）



写真 16 第四寝室（昭和 11 年当時）

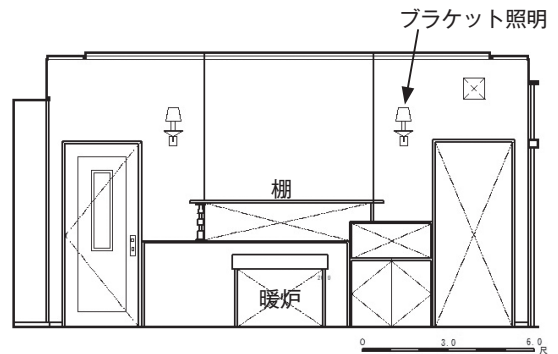


図 13 「第四寝室」暖炉廻り 展開図（東面）（作成）
（写真はいずれも『鎌倉文学館 収蔵コレクション』より抜粋）

れた遺構が多いが、鎌倉別邸の場合には、居間・客間や書斎など格式が高く接客を兼ねる居室に、洋室の暖炉廻りの構成要素として座敷飾が採用されたと考えられる。

V 渡辺栄治設計作品との比較

（1）前田家世子邸の暖炉廻り

1933（昭和 8）年に竹中工務店により建設された前田家世子邸は、同じく 1929（昭和 4）年に竣工した前田家本邸洋館の近隣敷地の前田利建邸である。1945（昭和 20）年に爆撃に遭い焼失したため、存続したのは 12 年ほどで、その内部意匠は渡辺家古写真でのみ確認できる。⁽⁵⁴⁾

一方、前田家近代史料では前田家世子邸の設計図面が一式保管されているのが確認できた。前田家



写真 17 前田利建邸 客室（渡辺家所蔵）

での渡辺栄治による最初の設計作品となる。鎌倉別邸と同様に詳細図が多く描かれており、現状では、渡辺栄治設計作品として鎌倉別邸との相違点などを比較できる唯一の図面類といえる。⁽⁵⁵⁾室内を描いた詳細図は渡辺栄治の作風を考察するための参考となり、一部は数枚残された渡辺家古写真に写る姿とも一致する。

室内の古写真では、床の間はないが左右非対称で、長押風の水平部材による内装仕上の区分けや暖炉中心としたマンテルシェルフを進展させたカウンター・飾棚・ステンドグラス窓など収納塗装色を兼ねた座敷飾のような暖炉廻りの構成となっている。

(2) 内藤政道邸その他設計作品

内藤政道邸は、内藤家所蔵の古写真では和風要素が混在した和洋折衷の内部空間は確認できなかった。内藤邸は2間続きの書院造の座敷などが備えられ、洋館の一部に座敷空間が作られていた。内藤家は能楽や刀剣など古美術の収集でも知られたことから、和洋折衷でなく書院造の座敷を必要としたと考えられる。一方、洋室の暖炉廻りの古写真では、暖炉と棚をL字に配置した暖炉廻りの構成が確認できた。また、その他渡辺栄治設計とみられる松山邸や末松邸の渡辺家古写真でも、居室の暖炉周りにL字に棚を配置した空間構成がみられた。

つまり、渡辺栄治は、鎌倉別邸以外でもL字配置で暖炉廻りを構成して空間意匠を構築する設計を行っており、それが特徴の一つとなっていると考えられる。

(3) 渡辺栄治設計の内部空間について

渡辺栄治について、前田家史料をはじめ諸々の資料から、経歴や作品などがより明らかとなった。渡辺自身による言説がないため主に写真や設計図などの調査からの分析になるが、外観は複雑な屋根を持ち凹凸が多く左右非対称なハーフティンバーが多く、内観もハーフティンバーとし、暖炉廻りはL字に水平を強調する棚を配置するなどの特徴が確認できた。また、設計作品はパターン化することなく、施主の好みや要望に応じて設計を行った結果、各住宅によって個性的な住宅となったと推察される。とりわけ、居間・客間など主要な室空間の暖炉廻りでは、平面的には暖炉と棚と中心にL字

型に配置していたことが特徴と考えられる。そのため、和洋折衷型の暖炉廻りとしてみると、マンテルシュルフの幅を左右に伸長して棚を組み合わせた暖炉で、より水平線が強調された暖炉廻りといえる。

(4) 前田家本邸洋館との類似点

渡辺栄治が工事監督として関わった前田家本邸洋館についても触れておきたい。設計は高橋貞太郎⁽⁵⁶⁾で、当時「東洋一」と謳われた昭和初期の代表的なチューダー様式の建築である。暖炉についてまとめられた研究はないため、暖炉の構成について分類分けした（表8）。

各所の暖炉はすべて寄木張床・壁付暖炉で、食堂・夫人室・主寝室は格天井となっているが、暖炉と同じ部屋に床の間は併設されていない。ただ1か所、書斎の前室には、暖炉はなく、膝丈高さの床の間が設置されている（写真18）。この背面壁は布張で、上部には落掛のように中央のみ内法長押が高位置にあることから、床の間を洋風にアレンジしたものとなる。しかし、床の間と暖炉とは内部空間を共有しておらず、L字配置もみられない。一部格天井や大引天井などハーフティンバーは共通しているが、暖炉廻りや詳細の構成要素に目立った類似点はみられない。本邸と鎌倉別邸は、ハーフティンバーの要素以外は外観や平面構成も異なり、とりわけ暖炉廻りの意匠の構成は、鎌倉別邸は渡



写真18 前田家本邸洋館 書斎次の間（筆者撮影）

表8 前田家本邸洋館における主要居室の暖炉の構成と内装意匠

	床	設置	MO	HM	MS	MSW	壁	天井	備考
1階 階段下	寄木張	壁付	—	—	●	—	壁紙	漆喰彫刻	イングルヌック
大客室	寄木張	壁付	—	—	●	●	壁紙	漆喰・大引	
小客室	寄木張	壁付	—	—	●	●	壁紙	漆喰・大引	
大食堂	寄木張	壁付	—	●	●	—	壁紙	漆喰・格天井	アーツ & クラフツ型
2階 夫人室	寄木張	壁付	鏡付	—	●	●	壁紙	漆喰・格天井	
寝室	寄木張	壁付	—	—	●	—	壁紙	漆喰・格天井	
次男居室	寄木張	壁付	—	—	●	—	壁紙	漆喰	
長女居室	寄木張	壁付	—	—	●	—	壁紙	漆喰	
次女居室	寄木張	壁付	—	—	●	—	壁紙	漆喰	

辺栄治のオリジナルで特徴的なものといえる。ただ、高橋貞太郎の設計に関しても関係者の記録や言質が十分確認できていないことから、両者の作風比較などはさらなる作品の分析が必要であり別の機会へ稿を改める予定である。

VI 結論

鎌倉別邸及び暖炉廻りを中心とする住宅内部意匠の分析から、以下の結論が得られた。

1. 大正・昭和にかけて日本で発売された国内外の暖炉の写真集を分析した。大正期には約半数が典型的なオーバーマンテルの装飾付きのいわゆる壁付装飾的暖炉であったが、昭和初期の海外の事例には装飾的な暖炉は減少し埋込式や装飾を排除した暖炉が現れている。それらは、その後マンテルシェルフ自体を進展させて本棚と組み合わせたものや、棚を含めた装飾を排除し壁と一体化するなどモダンな暖炉廻りとするなど、様々な構成が生まれた。
2. 明治中期頃から和洋折衷の住宅様式が流行し、内部空間の暖炉廻りにも影響があった。文献から、暖炉は床の間と同様に室内意匠の中心と考えられ、伝統的な和風住宅に洋間を設ける事例のほかには和室の内部に暖炉を設置する事例もみられた。
3. 日本近代における暖炉の構成について、分類したモデルを示した。従来、壁付の配置が中心であったが、埋込型や独立型の設置方法のものが増加した。また、オーバーマンテルやマンテルシェルフの長さや端部のデザイン、マントルピースの設置高さなど、装飾の有無以外の要素を加えた分類とした。
4. 当時最新式とされた昭和初期の海外の暖炉廻りを特集した国内の建築専門写真集では、オーバーマンテルを持たない非装飾的でモダンな暖炉や暖炉を埋込式として壁全体まで拡大して室内装飾とする暖炉廻りを設置した事例が増加しており、多くの国内の建築家が参考としたとみられる。
5. 鎌倉別邸では、居間兼客間や書斎や食堂などの共有空間では暖炉廻りは棚・暖炉・窓という書院造の座敷飾のような要素で構成され、マンテルシェルフ幅を伸長した暖炉が多いのが特徴である。居間・客間など格天井が採用された主要な部屋は、床の間と暖炉がＬ字形平面位置で構成されていた。一方、寝室などの私的空間では、暖炉はベッドの足元に配置されていたことから、設計者は暖炉廻りの構成を公・私的空間で区別して設計されていたとみられる。

鎌倉別邸にみる和洋折衷型の暖炉廻りの構成は、洋室を基調として暖炉廻りに床の間を共存させ建具や天井などに和風要素を取り入れ、伝統的な座敷飾の構成要素と洋風の構成要素を調和させた、和より洋を中心とした事例といえる。また、棚・暖炉・窓を暖炉廻りの３要素としたとき、床の間を取り込む際に襖・障子や格天井などの和風要素をさらに多く取り込んでいることや、暖炉と床の間をＬ字配置にする構成を採用したのが特徴的である。

鎌倉別邸の特徴について、昭和初期に建設され和洋折衷とされる住宅の室内空間の暖炉廻りについて注目した。設計者の渡辺栄治は当時異なる様式を混合させながら調和させる設計を試行した設計者の一人であったと考えられる。⁽⁵⁷⁾

おわりに

今後の展望としては暖炉廻りの詳細の分析や設計者渡辺栄治が影響を受けた建築家やその作風について調査し現存遺構の少ない昭和初期から戦前にかけて設計された住宅作品や建築家に関する研究を深めていきたい。また、暖炉の暖房設備・器具としての役割や燃料の発達や空気調和などの衛生思想との関連についての考察も触れていきたい。

謝辞

本論文は、神奈川大学非文字資料研究センター奨励研究助成金論文として提出するものです。

本研究の資料収集にあたりましては、前田利祐様、前田家関係者様、渡辺家関係者様はじめ、公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫の皆様、鎌倉市役所文化課の皆様には、貴重な資料及び聞き取り調査にご協力いただき、感謝申し上げます。

そのほか、現地調査では、博物館明治村及び旧高取邸関係者様に、神奈川大学図書館司書の皆様には資料収集にご協力いただきました。

また本研究をまとめるにあたり、神奈川大学建築学部内田青蔵教授をはじめ、姜明采特別助教、内田研究室の皆様、本大学非文字資料研究センターには、研究活動の機会と資料収集や調査支援を頂き、感謝申し上げます。

注

- (1) 鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書、鎌倉市都市景観課、pp. 7-8、2013
- (2) 国指定文化財等データベース、文化庁、登録番号 14-0041、2000. 4. 28 登録
- (3) 前田利為、前田利為侯伝記編纂委員会、p. 333、1986
- (4) 「鎌倉別邸は先代利嗣侯により明治中期に創設され、既述のごとく……（中略）……たびたびの行啓を拝した由緒あるもので、前田家としても特に利用度の高いものであった。」（『前田利為』 p. 331）
- (5) 「昭和十年（1935）前後におけるわが国内外の情勢は、ますます深刻の度を加え、……（中略）……かかる情勢の中で、利為侯は『大勢如何トモ為シ得ズ』との想念を固め、鎌倉別邸の本邸化、墓地選定当一連の身辺整理の発想へと変化したものと思われる。利為侯身辺に長く奉仕した高柳良幹氏も『このころから駒場邸開放、鎌倉別邸を定住邸とする』構想が生まれたことを証言している。」（『前田利為』 pp. 332-333）
- (6) 「鎌倉文学館本館」（国指定文化財等データベース（URL <https://kunishitei.bunka.go.jp>）、2023. 9. 30 現在）。
- (7) 「鎌倉文学館本館」（『日本近代建築大全 東日本篇』講談社、2010）
- (8) 益財団法人前田育徳会監修、加賀前田家と尊経閣文庫、2016
- (9) 浪川幹夫、前田家鎌倉別邸の変遷、鎌倉（76）、pp. 34-50、1994、浪川氏発表（1994）以降、鎌倉別邸創設は「明治 23 年」とされている。同氏のブログ、前田家鎌倉別邸略年表、知られざる鎌倉（加賀百万石の別荘その 4（kcn-net.org）、（2023. 7. 21 現在）も参考とした。
- (10) 村上紀史郎、加賀百万石の侯爵 陸軍大将・前田利為、藤原書店、2022。実業家村井吉兵衛との交流が、記されている。父の弥兵衛の先代が加賀・鶴来で養蚕業・漆業・タバコ商を営んでいた。1919（大正 8）年加越能出身者による帰朝祝賀会に同席、1925（大正 14）年の菊子との結婚式に招待など。
- (11) 島本千也、鎌倉別荘物語 明治・大正期のリゾート都市、1993。明治期の別荘について鎌倉別邸に関する

- る記載がある。
- (12) 「淳正公年表稿」は1888～1893、前田利嗣の伝記『淳正公家伝』永山近彰、高木亥三郎、1921（大正10）の淳正公年表の原稿とみられる前田家の日誌。明治21～25年までが閲覧可能な状態であった。同24-25年は下半期の記録が失われている（石川県金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）。
 - (13) 前田家近代史料の「資産調査報告書」（『決算書』）でも明記されていることから、同年の10～11月頃に地所を購入したことは確認できた。
 - (14) 拙稿「明治期の旧前田家鎌倉別邸に関する研究——前田育徳会近代史料からの考察（1）——」（日本生活学会大会第50回大会発表梗概集、日本生活学会、2023）
 - (15) 「渡辺栄治」（堀2021：1403）記載（本稿では現代漢字表記）。
 - (16) 渡辺栄治の死後に自宅改築の際に整備され、渡辺家遺族により保管されてきた。大正期から昭和初期とみられる写真帖とバラの写真など約200枚以上に及ぶ古写真である、拙稿（注34・54）にて解説。
 - (17) 拙稿「建築家渡辺栄治の経歴と建築作品について」日本建築学会計画系論文集（88）、pp.1432-1437、2023
 - (18) 関川華「近代日本の住宅における暖炉の導入とその展開に関する研究その1——外国人居留地に建設された住宅における暖炉の様相——」日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）2018。
 - (19) 『建築写真類聚』は、大正期から昭和16年まで洪洋社により定期的に刊行されていた建築専門の雑誌。基本的に、月2回定期刊行され、各巻は50シートに建築写真が収められている。
 - (20) 『大正天皇記』『大正天皇実録 補訂版 第一 明治十二年～明治三十三年』（ゆまに書房、2016）に「旅館として」と記載されている。
 - (21) 1985（昭和60）年文学館への改修時には、地下にあたる1階部分を事務室や講義室といった運営スペースに改修し、北側にトイレ展示室を設けた。3階は前田家時代の主寝室などで、2023年現在は非公開となっている。当時の改修設計は佐藤武夫設計事務所（現在の佐藤総合計画）、施工は東急建設。
 - (22) 「侯爵前田家鎌倉別邸新築設計図 断面図」（前田家近代史料、前田育徳会所蔵）の図中にも、高低差の寸法が「6.0尺」と記入されている。
 - (23) 『竹中工務店 建築写真集 第4集』「長楽山荘」巻末データによる。
 - (24) 1984（昭和59）年の調査で壁内の状況確認により一部内壁を解体しているため、第一寝室や座敷の壁仕上は変更となっている。
 - (25) 山形県左沢生まれで、父は大工であった（渡辺家聞き取り調査から）。
 - (26) 山形県立工業学校はのちに米沢工業学校、現在は山形県立米沢工業高校と名称変更している。渡辺栄治と親交のあった建築家・佐藤秀三は5学年下で、渡辺自宅に佐藤秀三が訪問したこともあった（渡辺家聞き取り）。学校の同窓会誌『工友会雑誌』に渡辺栄治の卒業後の動向が記されている。
 - (27) 『前田家職員録』渡辺栄治の履歴記載による。村井銀行は煙草王と称された村井吉兵衛が創設した銀行の一つ。建築部長であった吉武長一の独立に伴い、同社建築部が解体となった。
 - (28) 村井銀行退社と同時に独立した吉武長一の吉武工務所に移籍。事務所の場所は村井銀行日本橋本社の2階であった（『工友会雑誌』（米沢工業同窓会誌）第26号）。吉武長一のこの頃の作品に、村井吉兵衛邸洋館（東京・山王台）、村井銀行日本橋本店（1913（大正2）年築）、安藤記念教会（1917（大正6）年築・国登録有形文化財・東京都有形文化財）などがある。
 - (29) 1915（大正4）年に明治神宮造営局が発足。渡辺栄治は1919（大正8）～1921（大正10）年まで造営局の名簿（技手）に記録がある。技師に高橋貞太郎、同じ技手に矢部金太郎がいた。
 - (30) 田園都市株式会社は1918（大正7）年に創立。1928（昭和3）年に東京目黒電鉄に吸収合併された。当時の実質的経営者であった渋沢秀雄の著書『わがまち』に渡辺栄治の記載がある。また、中浜東一郎の『中浜東一郎日記』に設計・建設時の記載があり、渡辺技師が数回登場する。
 - (31) 前田家事務所には1926（大正15）年に前田家本邸の工事担当として入所した。翌年の前田家本邸洋館の棟札に「囑託工事監督」として筆頭に渡辺栄治の記載がある。

- (32) 出典は注(27)に同じ。吉武長一工務所、村井銀行以外の渡辺栄治の職歴については『日本近代建築人名総覧』(堀 2021:1404)に記載がある。
- (33) 拙稿「田園都市株式会社時代の渡辺栄治設計の住宅作品について——中浜東一郎邸について——」(2021 年度日本生活学会大会資料集 (No.51)、2021)。中浜東一郎(1857-1937)はジョン万次郎の長男で、内務省衛生局局長や明治生命診査医長や日本保険医学会会長を務めた医師。森鷗外、北里柴三郎らとともに近代医療を築いた人物とされる。『中浜東一郎日記』(全5巻)は半世紀に及ぶ記録であり、日本衛生医学史においても注目されている。中浜邸は、『写真集 幻景の東京一大正・昭和の街と住い』(藤森編 1998:249)に、「水平線を強調した、ライトの影響を受けたライト風の洋風住宅の一つ」として紹介されている(「洋風住宅」「ライト風」の項)。
- (34) 注(23)に鎌倉別邸(表記は「長楽山荘」と内藤政道邸(同じく「内藤子爵邸」)、『第3集』に前田家世子邸が収録されている。拙稿「建築家・渡辺栄治設計の戦前期の住宅について——旧前田利建邸・旧前田家鎌倉別邸・旧内藤政道邸を中心に——(渡辺家古写真からの考察(2))」(2022 年度日本建築学会大会(北海道) 学術講演梗概集)。前田世子邸は駒場の前田家本邸隣地に建てられた前田利建邸。前田家疎開中の1945(昭和20)年に焼失した。内藤邸は「旧前田家建築係・渡辺栄治設計による内藤政道邸について——内藤家文書近代史料の『日誌』及び写真を中心に——」(2021 年度日本建築学会関東支部研究報告集、No.9026)、「資料解説 内藤政道邸の建設経緯について——明治大学博物館所蔵内藤家文書近代史料からの考察」(『明治大学博物館 2022 年度特別展 新しいお殿様——所替・その後——』、明治大学博物館、pp.110-113、2022)にて述べている。これ以外の作品も別途報告している。拙稿「建築家・渡辺栄治設計と推定される戦前期の住宅について——松山邸・末松邸を中心に——(渡辺古写真からの考察(1))」(2021 年度日本生活学会大会発表資料集)
- (35) 『図説 日本インテリアの歴史』(小泉 2015)「マントルピースの構成」(p.146)より抜粋、及び右段を追記した。
- (36) 注(35)に同じ。
- (37) 注(35) pp.102-115。
- (38) 注(35) pp.145-149。
- (39) 注(18)に同じ。
- (40) 『新版 図説・近代日本住宅史』巻末(内田ほか)より。
- (41) 赤坂皇居御会食所(現・明治記念館本館):1881(明治14)に諸外国の賓客をもてなすために建設された。1889(同22)年に明治宮殿に皇居が移り1898-1900(同31-33)年に解体され、1908(同41)年に伊藤博文に下賜、移築された。その後1918(大正7)年に現在地の明治神宮外苑に再移築された。「外観は御所風を基本としながら、洋風の寄木張りの板敷きの床とし絨毯や暖炉を導入した初期の例で、和洋折衷の様式に特徴がある。」東京都指定有形文化財(建造物)、2020(令和2).3.16 指定、東京都文化財情報データベースより抜粋(2023.12.4 現在)。明治宮殿は1888(明治21)年完成。設計はともに木子清敬(明治宮殿の洋風室内意匠は片山東熊)。
- (42) 岡本鋈太郎:旧清水組技師長などを務めた(堀 2021:288-289)。
- (43) 「和洋折衷住家の地繪圖に就て」(岡本鋈太郎、建築雑誌 9810、日本建築学会、1898)
- (44) 旧高取伊好邸:九州杵島の炭鉱王として知られる高取伊好(1850-1927)の自邸で、1906(明治39)年築部分と大正期以降の増築部分から構成される。明治期の部分には大広間に能舞台が、大正期の部分に洋間を備えた広大な近代和風建築である。佐賀県唐津市に現存する重要文化財。
暖炉は洋間1か所と和室である「書斎」と「寝間」の2か所に設置されている。和室の暖炉は平面的に背中合わせになっており、壁面の中央部分に配置されている。寝間の方は火箱扉がアーチ型、書斎の方が長方形で、双方とも扉面に漆塗りが施してあり、炉辺はマジョリカ風タイル貼。両脇に地袋・天袋の収納とし、中央部にナグリ加工のある落し掛が設置された暖炉が組み込まれている。暖炉部分は柱・上方壁面位置より内部に埋込み、奥行5寸ほどのMSは暖炉と同じ大理石製となっている。OMにあたる部分は1尺ほど奥行き

- があり、回縁には掛軸が下げられるよう、中央部に専用金物を取り付けられていたことから、暖炉は暖房設備として設置しつつ、床の間と同様の役目も果たしていたと考えられる。
- (45) 芝川邸は京都大学教授であった武田五一が設計した住宅で、阪神大震災後に明治村へ移築された。暖炉は、1階広間と2階座敷に1か所ずつ設置されている。2階座敷の暖炉は2畳の床の間と反対側に位置し、普段は地袋の襖で上手く隠されている。1階広間の暖炉の直上にあたり、実際に使用されていたとみられる。「2階座敷解体時写真43」（博物館明治村2010：170）より。
- (46) 安野彰「岡本鑑太郎が「和洋折衷住家の地繪圖に就て」の演説で示した第三圖と第四圖の住宅について」（安野2022）より。
- (47) 1924（大正13）年に、久邇宮家の日常生活の場として建築された御常御殿に先立ち、1918（大正7）年に竣工した旧久邇宮家創建当時の建物。御殿の設計は森山松之助で、小食堂は宮家造営課の設計とされる。パレスは和風基調で建築された宮家本邸の唯一の現存例とされる。小食堂の中央部、違棚と花頭窓に挟まれた中央部、落し掛の下方に、大理石製の暖炉が設置されている。
- (48) 『国立国会図書館所蔵写真帳・写真集の内容細目総覧：明治・大正編』（村上清子1987）
- (49) 『暖炉前の構成』序文解説。
- (50) 『建築写真類聚 床の間集 巻一』13に「青木鉄太郎氏邸 客間 東京大崎」と記載がある。
青木鉄太郎は、『日本紳士録』（大正6年）によると、当時は日本興業銀行理事営業部長兼信託部長、掲載の所在地である東京大崎に居住していた。1924（大正13）年には東京貯蔵銀行、高砂企業（株）の各監査、のちに外務省商務官も務めた人物である。当時の建物についてはほかに情報が得られていない。
- (51) 『建築写真類聚 床の間集 巻二』53に「中村歌右衛門氏邸床の間」と記載がある。中村歌右衛門初代は加賀藩の医師の子だったとして「加賀屋」を屋号とした（初代と3代、4代から成駒屋）。5代目は1911（明治44）年に襲名、1940（昭和15）年に引退している。
- (52) 高橋箒庵（高橋義男：1861-1937）は近代数寄者の一人とされ、大正期の茶会を催す中心的人物の一人であった（土屋和男「高橋箒庵の茶会記録に見られる仰木魯堂の初期作品に対する評価」（日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）2013）。齋藤康彦の著書によれば、「三井銀行、三越などで経営手腕をふるい、五十歳で実業界を引退してからは、数寄者として茶の湯三昧の人生を送った。益田鈍翁と双壁を為した」（齋藤康彦『高橋箒庵 近代数寄者の語り部』宮帯出版社、2020）。
- (53) 近世以前民家などで手斧（チョウナ）で表面をはつたような加工を施した意匠。
- (54) 拙稿「建築家・渡辺栄治設計の戦前期の住宅について 旧前田利建邸・旧前田家鎌倉別邸・旧内藤政道邸を中心に（渡辺家古写真からの考察（2））」にて渡辺家古写真から考察を行った。
- (55) 拙稿「渡辺栄治設計の旧前田家世子邸について——前田育徳会近代史料からの考察（2）——」（2023年度日本建築学会大会（近畿）学術講演梗概集）にて詳細図を紹介した。
- (56) 高橋貞太郎（1892-1970）：東京帝国大学から、滝川コンクリート勤務を経て、明治神宮造営局に入局。その後復興局、復興公社を経て独立。主な設計作品に、前田家本邸洋館のほか、川奈ホテルなどがある。『日本近代建築人名総覧』（堀2021）。
- (57) 1936（昭和11）年築の細川護立邸（現・和敬塾）（設計者白井弥枝：1885-1958）（堀2021：188）などが知られる。

参考文献

- 鎌倉市景観重要建築物等指定調査報告書、鎌倉市都市景観課、2013
- 前田利為、前田利為侯伝記編纂委員会、1986
- 菊池紳一、加賀前田家と尊経閣文庫——文化財を守り、伝えた人々、勉誠出版、2016
- 浪川幹夫、前田家鎌倉別邸の変遷、鎌倉（76）、pp.34-50、1994
- 島本千也、鎌倉別荘物語 明治・大正期のリゾート都市、1993
- 澤村修治、天皇のリゾート 御用邸をめぐる近代史、図書新聞、2014

- 洪洋社、建築写真類聚 文化住宅 巻三、1924（大正 13）
 洪洋社、建築写真類聚 文化住宅 巻四、1926（大正 15）
 洪洋社、建築写真類聚 床の間集 巻一、1920（大正 9）
 洪洋社、建築写真類聚 床の間集 巻二、1921（大正 10）
 洪洋社、建築写真類聚 暖炉 巻一、1921（大正 10）
 洪洋社、建築写真類聚 暖炉 巻二、1922（大正 11）
 洪洋社、建築写真類聚 暖炉前の構成、1933（昭和 8）
 小泉和子、図説 日本インテリアの歴史、河出書房新社、2015
 関川華、近代日本の住宅における暖炉の導入とその展開に関する研究 その 1 ― 外国人居留地に建設された住宅における暖炉の様相 ―、日本建築学会大会学術講演梗概集（東北）9450、pp. 899-900、2018
 佐賀県文化財調査報告書第 127 集 佐賀県の近代和風建築 ― 佐賀県近代和風建築総合調査報告書 ―、佐賀県教育委員会、1996
 高取日出子、高取家写真集 丹、高取紀子・日出子、2007
 田中保馬、肥前の炭鉱王 高取伊好翁、旧高取邸ボランティアガイドの会研修会資料、2022
 鎌倉市芸術文化財団、鎌倉文学館 収蔵コレクション、2002
 堀勇良、日本近代建築人名総覧、中央公論新社、2021
 内田青蔵、日本の近代住宅、鹿島出版会、2016
 内田青蔵ほか、新版 図説・近代日本住宅史、鹿島出版会、2008
 内田青蔵、あめりか屋商品住宅 ― 「洋風住宅」開拓史、星雲社、1987
 米山勇監修、日本近代建築大全 東日本篇、講談社、2010
 酒井美意子、ある華族の昭和史 ― 上流社会の明暗を見た女の記録、主婦と生活社、1982
 石川県立美術館編集・発行、前田利為と尊経閣文庫 図録、1998
 国指定名勝 懷徳館庭園（旧加賀藩主前田氏本郷本邸庭園）、国立大学法人東京大学・文京区教育委員会、2017
 長野県建築住宅センター、信州の建築と景観、新建築社、p. 241、1993
 藤森照信・増田彰久、西洋館デザイン集成 第 2 巻、講談社、1988
 藤森照信・増田彰久、歴史遺産日本の洋館 第 1 巻（明治篇 1）、講談社、2002
 藤森照信ほか、写真集 幻影の東京 ― 大正・昭和の街と住い、柏書房、1998
 （『写真集 失われた帝都東京』普及版）
 村上清子、国立国会図書館所蔵写真帳・写真集の内容細目総覧：明治・大正編、国立国会図書館、1987
 博物館明治村、明治村建造物移築工事報告書 第十二集 芝川又右衛門邸、2010
 井上祐一・小野吉彦、ライト式建築、柏書房、2017
 内田青蔵監、住宅総合研究財団編、明治・大正の邸宅 清水組作成彩色図の世界、柏書房、2009
 稲葉信子、木子清敬と明治 20 年代の日本建築学に関する研究、東京工業大学（博士論文）、1990
 安野彰、「岡本鑒太郎が「和洋折衷住家の地繪圖に就て」の演説で示した第三圖と第四圖の住宅について」、日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）、2022